こころの風景

その一

富永厚

こころの風景

―― 早春の長崎を旅して ――

一

世の中には、不思議とでも言うほかないような、現代の科学の論理や常識では、かならずしも十分な説明のつかない現象が見られる。それを迷信とか俗信とかいうことで、片付けてしまうことは至って容易だが、ぼくらが日々暮らしている日常の生活感覚の次元でいえば、そこにはそう簡単に割り切ってしまえない何かがあるように思えたりもする。問題は客観的な事実をめぐっての理性的判断の適否ではなく、もっと別な次元のこころの側の情感の世界における、感性的判断にかかわることがらであるとも言えよう。

今度ひさしぶりで父の郷里を訪ね、いろいろなひとに会って、いくつもの興味ぶかい話しを聞いたが、キリシタン弾圧をめぐって、二百数十年たった今もなお、ひとのこころに暗い翳を残している実例に出会った。それは遠い親戚筋の一家におこった話しである。

その家は徳川の頃は、ぼくのところと同様に侍であったが、たまたま家屋敷が港に近かったせいで、年に一度、宗門改めのため村人に踏絵を踏ませる会場になっていた。隣の島の平戸から役人が出向いてきて、村人全員を集め、その屋敷の中庭で、衆人環視のもと厳しい詮議が行われる慣しだった。踏絵を踏まないものは、ただちにその場から連れ去られ、別な刑場で処刑されることになった。

村人の多くは、心中ひそかに信仰をもちつづけながらも、よんどころなくその都度踏絵を踏み、転び、いわゆる隠れキリシタンとして生き残る道を選んだ。しかしなかには、そうした擬装や欺瞞を潔よしとせず、信仰に殉じるものも少なくなかった。いわばこの家の中庭は、ひとの生身の生死を決定的に分ける検察と審判の場でもあり、精神への惨たらしい凌辱と屠殺の現場でもあったということができる。

親子・夫婦・兄弟のあいだを引き裂かれ、あるものは殉教の血を流すことになったし、あるものは生きのこりはしたものの、裏切りと背信と屈辱の重荷を背負うことになった。天国における魂の救いを信じて死に行くものにとっても、地上の生活のためにそれを諦めたものにとっても、まさにこの中庭はこの世の地獄だったに違いない。（いつの世の権力も、なぜこのようにひとびとを苦しめのことしかしないのだろうか・・・）

そのうち、この家におかしなことが続くようになった。何代にもわたって、男の子が育たないことになった。流産や死産、あるいは折角産まれても、赤ん坊のうちに死んでしまい、他家から跡取りに養子を迎えなければならないといったことが、

何代も続いた。いくら神仏に祈願しても、場所柄のたたりか、呪いにとりつかれているのではないかと、御祓をしても、男の子に恵まれたいとの一家の願いは、一向に実らなかった。

数年まえ、これもやはり養子の当主がふと思いついて、教会を訪ね、事情を話したあげく、神父がじきじきにこの家にやってきて、神に許しを乞う儀式を執りおこなった。それからしばらくして、娘が身ごもり、無事男の子が産まれ、幼稚園に通う現在もたいへん丈夫に育っているそうだ。その一部始終を、嬉しそうに語って聞かせてくれたおじいさんと、家族のまわりをその男の子が無邪気に走りまわっていた。

無論これをたんなる偶然と考えるほうが、常識に適っているであろうし、科学者ならばその原因をもろもろの角度から検討し、DNAとか栄養状態とか環境の変化とか、さまざまなデータを集めたうえで、なんらかの解説を加えてくれることであろう。しかしこの家のひとたちが信じているように、この屋敷と一族にからみついていた呪わしい運命から、ともかくも離脱できたというその安堵感、解放感、それもまたひとつの紛れもない心的事実であって、そこにも科学的真理とは別種で異質の、人間的真実が存在しているといってもよいのではないだろうか。

二

島には、父が生きている頃から、ほんとうに親身に世話をしてくれた一家がある。「ヒサトヨ（久豊）のおじい」と呼んでいた老人は、もう二十年程まえに亡くなり、いまは孫の代になっている。老夫婦には息子がいなかったので、娘に婿を迎えたが、最近その婿養子も死に、孫が跡を継いでいる。

ヒサトヨのおじいは、ぼくが大学生の頃には、島有数の網元になっていて、何隻もの船を持ち、たくさんのひとを使って、近海や遠洋で大掛かりな漁をやっていた。おじい自身、若い頃から漁師をしていたので、玄海灘や東シナ海の荒波を、魚を追って漕ぎまわった、永い苛酷な日々が、まさに赤銅色に日焼けしたその顔に、深いひだのようなしわを刻みこんでいた。年老いてもさすがに、がっちりした体格と精かんな風貌は残っていた。だが、笑うと顔から目が消えてしまうほど、柔和な面差しで、その暖かい人柄が全身からにじみでていた。背がたかく、その大きく厚い手と太く長い指が、とても印象的だった。

今様の機械化以前の時代には、手漕ぎの舟を操って、櫓一ちょうで、対馬海峡を漕ぎわたり、済州島か朝鮮本土まで往復してはじめて、一人前の漁師と見なされたものだという。ぼくの父が、隣の島の平戸にしかない中学を受験する日、たまたま大しけになって、舟でわたることができないほどの高波が荒れ狂っていた。この悪天候ではとても舟を出すのはは無理と、諦めかけていたところ、命に賭けて坊ちゃ

まを無事対岸へおわたししますといって、おじいは怒涛逆巻く急流の雷海瀬戸を、ものの見事に漕ぎわたったということだ。

その勇気と腕と努力の甲斐あって、漁師から網元へと一代で家を興し、隆盛を誇るまでになったが、孫の代になって、つい最近二十数億の負債を抱えて倒産してしまった。魚相手の商売は、多分に運次第であって、いったん不漁が続くと、お手あげというリスクにつきまとわれている。いま住んでいる立派な邸宅も銀行の抵当にはいっているので、まもなく立ち退かなければならないとのことだった。

おじい夫妻がなぜあれほどまで、ぼくの家に尽くしてくれるのか、あまりの献身ぶりと図抜けた親切さに、無論こころから感謝しつつも、いつも驚かないではいられなかった。以前聞いたところでは、おじい夫妻は独身時代に、ぼくの祖父母のもとで、それぞれ下働きをしていたが、結婚後ある年ひどい飢きんに見舞われ、たねもみまで食べつくしてしまうほど一家が困窮してしまった。その折りに、祖父母が蔵の米を皆に提供して、難を救ったことがあったそうで、その恩義をいつまでも忘れないで、恩返しをしてくれているのだとかいうことだった。

村の小学校の初代校長や村長なども勤めた祖父と、祖母が、村人から慕われ、尊敬されていたらしいことは、ぼくなどが屋敷の近くを歩いているとき、道すがら出会う村人がほとんどひとりのこらず、丁寧に頭を下げ、挨拶をしてくれるところからも、察しはついた。たんに以前侍だったということだけでは、大正や昭和になってまで、ひとびとがそれほどの好意をよせてくれる筈はない。ひとを慈しみ、ひとのために努めよとの「仁」のこころを、常々父に説いたという祖父が、凶作にあたって、村人に自分の蔵米を分けたということは、事実であろう。しかしそれにしても、おじい夫妻が、とりわけ献身的に尽くしてくれるのは、どうしてなのだろうか・・・・・。

その訳が今度はっきりした。それはおじいとおばばの結婚に際して、祖母が果たしたこころ配りと足労に、起因していたのである。おばばには、親の決めた許婚がいた。両家の相談がまとまり、間もなくおばばはフィアンセのもとへ嫁がなければならないことになった。しかし、おじいとおばばは、ある頃から互いにこのひとこそとふかく愛しあっていた。婚礼の日に、おじいは花嫁姿のおばばを、祝いの席から奪いだし、行く先もなく、ぼくの祖父母の家に逃げ込んできた。村中大騒ぎとなった。事情をのみこんだうえで、祖母は若い二人を奥座敷に匿うことにした。

しかし、なにせまえまえから、親同士がこどもの婚約をとりかわしていた間柄のことだから、おばばの家も相手の花婿の家も、そのまま黙って見過ごす訳にはいかない。再三祖母のもとへ両家から談判に訪れた。そのたびに、祖母は本人たちに話しを伝えると言うだけで、無理矢理二人を引き離すことはしないで、そっと様子を見ていた。そのうち、二人はこれ以上隠れていても、はたに迷惑をかけるばかりな

ので、いっそ心中をするほかないと話しあっていることを、祖母が聞きつけた。「それほどまでに愛しあっているのならば、死んだ気になってやり直し、違約を一生かけて償いなさい、わたしが貴方たちに代わって詫びてあげよう」と、二人を諭し、自ら両家に足をはこんで、鄭重に了解を求めた。

富永様の奥様がわざわざ訪ねて見えられ、折りいってのお頼みとあれば、致し方あるまいということで、不法な略奪婚がしぶしぶ黙認されることとなった。一時はいきり立っていた両家の縁者や関係者も、振りあげていた拳をおろし、それ以上二人を追及することをやめた。こうしてこのロマンスは、晴れてめでたく実を結ぶ結果となったのだった。

祖母がおばばの家を訪れた際、おばばの母親が手を合わせ、祖母に向かって拝むようにして、感謝の気持ちを述べたという。だれにもいえないことで、じっと自分ひとりの胸に秘めていたことなのだが、実のところは、おじいがよくぞうちの娘を、婚家先から奪いだしてくれたと思っていたのだ。許婚の男よりおじいのほうが、ずっと立派で良い人間であり、娘を幸せにしてくれるに違いない、と。

しかし、主人の決めた約束に、妻の自分が口出すことも適わず、娘の気持ちも分かっていながら、どうすることもできないで、苦しんでいたのだ。「おじいが万難を排して、娘と結ばれ、死まで覚悟したとき、奥様が助け舟を出して下さり、こうしてじきじき家にまで来ていただいて、二人を一緒にするよう夫に話してもらえたことは、自分としてもこの上なく嬉しい」。そういって、泣き崩れたとのことだった。

おじじとおばばは、ほんとうに仲睦まじく愛し合い、ひとが羨むほどのこころ暖かい家庭をつくりあげた。晩年おばばのほうが足を痛め、やや歩行に難儀するようになったが、おじいはいつもおばばの身を案じて、細かく気をくばり、介添えに精を出していた。おじいは、強いばかりでなく、ほんとうに優しく、情愛豊かな好人物だった。顔いっぱいに笑みを浮かべたときの、見えなくなってしまう目の優しい表情を、いまもぼくは忘れることができない。おばばもおじいに劣らず親切で、こまめによく世話をしてくれた。

その二人が身を粉にして働き、一生かかって築き上げた身代が、三代目にして潰え去ろうとしている。いろいろ事情があるにせよ、痛ましい限りというほかない。二人のあいだに生まれた娘も、もう七十に近くなっているが、両親に似て、気立てがじつに優しく、ぼくの家の墓と、寺の本堂脇の別棟に並んでいる仏壇に、いつも欠かさず花を供えてくれている。　今度も港まで出迎えてくれたばかりでなく、先祖とともに父の分骨が埋葬してある墓とお寺に同行してもらえた。そのあとで、まもなく引き払わなければならない、家屋敷を訪ね、改めておじいとおばばの位牌にお線香をあげ、別れの挨拶をした。ぼくの父の描いた梅の絵が斜め向かいに掲げ

てある、おじいとおばばの穏やかな面だちの写真をみあげながら、しばし断腸の想いでぼくは立ち尽くしていた。

「わたしの力が及びませんで」と、肩を落として小声で語る息子と、その傍らの母をまえにして、慰めの言葉もうまく見つからなかった。「なにごとにも、ときの流れということがあるでしょうし、運もあるのですから・・・・」。 せいぜい僕はそれくらいしかいえなかった。「そうでございますよなあー、ときの流れなんですよなあ・・・」。 気弱な息子を庇うように、語気を強めるようにして、大きくうなずきながらぼくの言葉を継いだ老婆のせつせつとした語りが、胸にこたえた。

きっと、おじいもおばばも同意してくれるに違いないと、ぼくは思った。あれほどまでに神仏に敬虔で、信心ぶかいこの一家を、神も仏も見捨てるなんてことがあろう筈がないではないか。僕は胸の奥底から衝きあげてくる激情を、じっとこらえながら、この一家の再興を一心に祈念した。

何人ものひとに交じって、老婆とせがれの二人とも港のフェリー乗り場のところまで、送りにきてくれた。「なんのおもてなしもできなくて」と、繰り返し二人が詫びをいった。さぞ悔しいことだろうと、僕は察した。

船が岸壁を離れ、人影が小さくなるまで、ぼくは手を振りつづけた。「頑張って下さいよ・・・」。船の汽笛が防波堤のなかいっぱいに、こだまし、音の渦巻きが激流のように、体をつきぬけていくなかで、波止場で手を振っている親子に向かって、ぼくぼくはこころのなかで精いっぱいの大声で、そう繰り返し叫ばないでは いられなかった。